



## 夜桜閑話

大峯郁衣

清水へ祇園をよぎる桜月夜

こよい逢ふ人みな美しくしき

この春も、私はしきりにこの歌を口ずさみながら夜桜を観た。

日頃は短歌などに縁のない生活をしているのに、高校時代以来、なぜかこの一首だけは、年旧ることにあでやかな光景となつて浮かんでくる。

ひよんな気持から、久しぶりに図書館に向いて、歌集『みだれ髪』をひもといてみた。

与謝野晶子二二歳の時の歌とある。しかも、京都は寛(鉄幹)と逢瀬をかさねていた場だというから、この歌は、きつと、二人で人込みの中をそぞろ歩きしながら清水寺へ向かっていた時の満ち足りた心を詠んだ愛の歌なのだろう。だからこそ、晶子には、たとえ醜女でも醜男でも、ネコもシャクシもみな美しく見えたのにながいない。

京の一千有余年という時間と空間の悠久の流れに逆らつて、熱情的に、大胆奔放に生きた晶子の若い日の瞬時の肉声が聞こえてくるようである。

それにひきかえ、私の観る夜桜は、住宅街の大通りの両側に立ちならぶ山桜で、月の光よりも街灯に照らしだされているといった風情のものである。それでも、昼間は一キロ余のトンネルを織りなす桜道に車がぎっしりと連なり、窓から顔を出して桜を見上げる観光客でにぎわう。

さて、夜も一〇時を過ぎるとほとんど人氣がなくなり、まるで静謐の世界。私は防寒着をはおつてひとり夜桜を見上げるといのが近年のスタイルになってしまった。が、晶子のような華やいだ夜とは程遠い内省的なひとときである。それは、私が年を重ね、周りの親しい人たちを徐々に失つていっていることによるのだろう。

年年歳歳 花相似たり

歳歳年年 人同じからず

青黒い空を背にした桜のあでやかさは、昼間のそれとは比べものにならないくらい引き立ち、息をのむばかりの美しさである。その美しさゆえに、夜桜には死の匂いがする(と、誰か先人が言ったような気がする)。広大な宇宙にのみこまれていく「いのち」の生々流転の相が宿っている。昼間の桜が太陽の下に咲く男性的な花であるとするれば、夜桜は月光にたよる女性的な花に変わるといえるだろうか。こんなことを言ったら、二二世紀を闊歩する女性軍にひっぱたかれそう。ご用心、ご用心。だが、桜とは、昼の陽と夜の陰の二種の気を放つとするのがどうも奥義のような気がする。だから、桜見物は、昼と夜にしてはじめて桜を観たということになるのではないだろうか。昼だけでは花七日も半減する。

註 花七日…「桜の花の咲いている期間はわずかに七日間である」という意のことわざ。